北海学園大学

日本語教員養成課程

『報告書』第７号

北海学園大学
2022 年 3 月

日本語教員養成課程報告書　第７号
特集：新型コロナウイルス感染症の影響下での日本語教師養成

目　　次

1. コロナ禍における日本語教員養成　丸島　　歩 …… 2
2. 2021 年度　北海学園大学日本語教育実習　プログラム …… 3
3. 韓国大田大学校でのオンライン日本語教育実習　岩永　沙那 …… 4
4. 韓国大田大学校とのオンライン日本語教育実習を終えて　山田　泰昭 …… 6
5. 海外の大学でのオンライン日本語教育実習
―2021 年度「日本語教育特別演習」の実践―　丸島　　歩 …… 8
6. 日本語ボランティア教室「たんぽぽ」でのオンライン授業見学を終えて
吉川　真生 …… 14
7. たんぽぽさんのオンライン授業を見学して　福居　桃子 …… 15
8. 日本語学習者向けオンライン交流会の発展 …… 17
9.「にほんご☆ぼうけん」体験レポート　齋藤穂乃花 …… 18

コロナ禍における日本語教員養成

日本語教員養成課程委員　**丸島　　歩**

2020年1月に日本で初めて新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染者が確認され、3月下旬より感染者が急増して以降、これまで対面で授業を行ってきた世界中のさまざまな教育機関でオンライン授業への切り替えが余儀なくされています。本学の日本語教員養成課程もその影響を強く受け、特に実習をともなう科目で例年通りの運営を行うことが難しい状況が続いています。

国内外の日本語教育の現場も同様に対応に追われています。その一方でこの状況をチャンスととらえて新しい試みがなされ、効果的なオンライン授業の実践が日々積み重ねられています。

本学の日本語教師養成においても、この新しい流れをこれからの日本語教育現場を担うであろう受講生たちに吸収してもらうべく、むしろ今までの状況では叶わなかった新しい試みを行ってきました。

第7号では、2020年度から2021年度にかけて日本語教師養成の一環として行ってきた活動の報告を取り上げます。

まずは、協定校である韓国の大田大学校での実習授業です。従来は現地に渡航して行っていた実習を、2021年度はオンラインで行いました。対面の実習とは異なる環境での苦労もありましたが、貴重な経験になったことと思います。実習生2名のレポートを通して、その学びを知っていただけたら幸いです。

次に、札幌市内の日本語ボランティア団体「たんぽぽ」のレッスンでの授業見学です。例年は対面で行われているレッスンが、2020・2021年度は感染症対策のためにオンラインに切り替えて行われています。本学の課程の受講者を見学者として受け入れて頂き、オンライン上で学習者と関わる機会を頂きました。

最後に、このコロナ禍で広く行われるようになった、オンラインでの国際交流の参加レポートを掲載しています。オンラインでの学びが当たり前のものとなったことで、世界中の日本語学習者が繋がることができる機会が増えています。日本語学習者の交流と会話練習のために国内外の日本語教師の先生方によって開催されている「にほんご☆ぼうけん」に、本学の学生が参加した際の体験談をご覧いただければと思います。

2021 年度　北海学園大学日本語教育実習　プログラム

1. 研修日程【2021 年 11 月 15 日（月）～11 月 19 日（金）】日程中、全て Zoom により進行。

11 月 15 日（月）午前 11 時～11 時 50 分 実習研修ガイダンス

11 月 15 日（月）～16 日（火）　授業見学 2 回（黒木・姜、各 1 回）

11 月 17 日（水）～19 日（金）　実習日：実習生各自、初級 2 回、中上級 1 回の実習

11 月 19 日（金）夕方　実習総括

2. 監督者・実習指導者、実習研修関係者

現地実習指導教官：大田大学校　黒木　了二　助教授

現地実習指導教官：大田大学校　姜蓮華（カン・ヨンファ）助教授

実習費管理担当：大田大学校国際交流院　金ナヨン（キム・ナヨン）先生

実習指導教授：北海学園大学　丸島　　歩　准教授

3. 北海学園大学日本語教育実習生 2 名

実習回数 3 回：初級 2 回（姜／黒木・各 1 回）、中上級 1 回（黒木）

授業見学

○ 11 月 15 日（月）午後 4 時～4 時 50 分

授業見学①「初級日本語会話（2）01 班」担当・黒木

○ 11 月 16 日（火）午後 1 時～1 時 50 分

授業見学②「初級日本語（2）」担当・姜

実習日程：実習授業の後、各自担当教官と時間を決めて、実習の反省会の時間を持つ。

○岩永沙那

初級 1 回目　11/16　火　6 限（14：00～14：50）「初級日本語 2」担当：姜

初級 2 回目　11/18　木　3 限（11：00～11：50）「初級会話 2・02 班」担当：黒木

中上級 1 回　11/19　金　5 限（13：00～13：50）「高級日本語会話」担当：黒木

○山田泰昭

初級 1 回目　11/17　水　6 限（14：00～14：50）「初級会話 2・02 班」担当：黒木

初級 2 回目　11/18　木　1 限（ 9：00～ 9：50）「初級日本語 2」担当：姜

中上級 1 回　11/19　金　6 限（14：00～14：50）「高級日本語会話」担当：黒木

韓国大田大学校での
オンライン日本語教育実習

経営学部経営学科４年　**岩永　沙那**

私は11月の１週間の間、教育実習に参加しました。ただコロナの影響もあり、実施はオンラインになってしまいました。実習は、初級・中上級のクラスでそれぞれ２回ずつ授業を行いました。

準備の段階では、慣れないオンラインでの授業を展開しなくてはいけず、今までに行った演習との違いに戸惑いました。ですが、どうしたら学習者に伝わりやすいかを丸島先生と試行錯誤することができたと感じています。授業見学では、実際にどのような授業が行われているのかを学ぶことができ、そこで学習者を覚えることができました。その時間を設けていただいたおかげで、オンラインながらもクラスの空気感を掴むことができました。

実際に私の授業では、初級では自己紹介をテーマに中上級では物をなくした状況について説明を行っていきました。学習者にたくさん話をしてもらうということに照準を当てて授業を展開していきました。そこで、驚いたことはみんなオンラインでもしっかりと話をしてくれるということです。日本語への意欲の高さを感じて、とても嬉しくなり授業中なのに涙が出そうになりました。ただ、オンラインのため授業中しか学習者とコミュニケーションを取ることができなかったのは残念だったと感じています。

はじめは、自分に50分授業ができるのだろうかと不安を感じていましたが、授業が始まった瞬間から楽しくなり、学習者も楽しく日本語を学んでいることが本当に嬉しかったです。また、授業の度にフィードバックを頂くことができたため、その都度直してより良い授業ができていたなと感じています。その他に、先生の授業で学んだアクセントの修正やZoomのコメント欄を自分の授業に取り入れられたのは良かったです。さらに、この慣れない環境の中いろいろ試行錯誤をして私たちのことを考えてくださった先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

この経験を通して、より日本語教師という職業を身近に感じることができ、やりがいも感じることができました。例年に比べると短い時間だったとは思いますが、本当に充実した１週間となりました。もっともっと日本語の知識を身につけて、いろいろな国の人が楽しく日本語を学べる授業を行いたいです。

授業見学の様子

実習授業の様子

韓国大田大学校との オンライン日本語教育実習を 終えて

人文学部日本文化学科４年　**山田　泰昭**

新型コロナウイルスの影響により2020年度の「日本語教育特別演習」は中止になり、2021年度もその実施の可否が危ぶまれておりましたが、大田大学校との間でオンラインによる教育実習が初めて行われることになりました。私は、日本語教員の資格を取る目的で本学に入学したので、日本語教員養成課程の履修科目の中でも、この「日本語教育特別演習」の教育実習を楽しみにしておりました。オンラインで行うと聞き不安もありましたが、丸島先生がバックアップしてくださるということで参加を決意いたしました。

研修日程は、11月15日（月）～11月19日（金）の１週間、授業はすべてZoomで、本学のA201教室で行いました。実習回数は３回で、初級を２回と中上級を１回、１回の授業時間は50分でした。本学側の実習生は私と経済学部の岩永沙那さんの２名が参加し、大田大学校の黒木先生と姜先生に実習指導をしていただきました。

10月から本格的な教案と教材の作成を始めました。これまで日本語教授法の授業では、15分程の模擬授業の教案作りしかやってこなかったので、50分の教案は長いと感じました。学生のレベルが分からない中で、何を題材にしてどんな授業をするか、教案作は何度も添削を受けて時間がかかりました。丸島先生には、いろいろな教材を紹介していただき、パワーポイントの用法やイラストの使い方、日本語教授法のトレンドを教えていただくことができ、今まで知らなかった日本語教授法を知ることができました。

大田大学校における黒木先生と姜先生の日本語授業は、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業により行われていました。実際の日本語授業の現場というものを見たことが無かったので、お二人の授業を見学させていただけたことは、授業の組み立てを知るうえでとてもとても参考になりました。今回の私たちの授業は直接法で行いましたが、その国の母語を使用し、早く学習者に意味を伝えてあげた方が良いのだ思いました。

私は初級クラスでは、『みんなの日本語』から「過去の経験の有無が言えるようになる」と中・上級クラスでは、『日本語　上級話者への道』を使い「自己紹介の仕方」をテーマにして実習授業をしました。実は、私は64歳なので、大田大学校の学生たちはとても戸惑ったのではないかと思われますが、学生たち皆には、とても真摯に向き合っていただき感謝いたします。

オンライン実習では、座りながらパソコンの横に、相手に見えないように教案や時計を置いて、見ながらできるという利点がありました。しかし、学生の声が聞こえない、聞き取れないなどの音声上のトラブルが何度かあり、今後の課題になると思いました。

今回のオンラインによる教育実習を体験し、ウイズコロナの時代における新たな「日本語教授

法」のあり方をみてきたように思います。この中で、反省点やいろいろな気付きを得ることができました。これらの経験を活かして、現在の「札幌子ども日本語クラブ」における、日本語の支援活動に努め、将来的には、タイに戻り日本語の指導をしたいと考えております。

最後に、コロナ禍で困難な状況の中、オンライン教育実習を企画してくださった丸島先生、大田大学校の黒木先生、姜先生、サポートしていただいた岩永沙那さんに感謝申し上げます。

実習授業の様子

海外の大学での
オンライン日本語教育実習
―2021年度「日本語教育特別演習」の実践―

「日本語教育特別演習」担当教員　**丸島　　歩**

1. はじめに

北海学園大学（以下「本学」）の日本語教員養成課程（以下「課程」）では、実際の教育現場で授業見学や実習を行う、「日本語教育特別演習」が開講されている。例年は札幌市内の日本語ボランティア教室と、協定大学である韓国の大田広域市にある大田大学校（以下「大田大」）での実習を行っている。しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により閉講せざるを得なかった。

2021年度も同演習授業において対面での実習を行うことは難しい状況が続いていたが、大田大からオンラインでの実習受け入れが可能である旨の連絡を受け、課程の受講生が実際の教育現場で授業を経験する機会を確保するため、実習授業の実施に至った。

2. 2021年度の授業概要

これまで、大田大での対面実習は、2016・2019年度の2度行われてきた。黒木・姜（2017）によれば2016年度の実習は10月24日（月）～11月4日（金）で、「2019年度　韓国大田大学での日本語教育実習プログラム」によれば2019年度の実習は11月11日（月）～11月22日（金）であった。どちらもおよそ2週間の日程が組まれている。実習生の人数はいずれも7名であった。

2021年度は4月の履修登録の段階で5名の登録があったが、実習先の大田大との事前打ち合わせを通して実習生の条件を設けたこととオンライン実習での実施が決まった段階で辞退者が出たため、2名での実施になった。そのため、実習期間も11月15日（月）～11月19日（金）のおよそ1週間に短縮された。

2.1　全体のスケジュール

オンライン実習の実施が決定したのが9月であったため、事前学習は集中的に行った。9月下旬から11月初旬にかけて、対面とオンラインを併用しながら教案・教材作成の指導にあたった。教材は主に学習者に提示するパワーポイント資料で、そのほかに配布資料を用意する場合もあった。実習では初級レベルのクラスで2回、中上級レベルのクラスで1回、それぞれの実習生が実習を行うことになっていた。初級レベルの2回は異なるクラスで行うことになったため、教案と教材は初級・中上級それぞれ1回分作成した。

教案・教材を作成したのちに、当日の実習授業を想定した模擬実習を行った。さらに大田大の実習担当教員から教案・教材の指導を受け、これらの修正や最終調整を行って教壇実習に臨んだ。

実習を終えたのち、12 月と 1 月に振り返りを行った。さらに実習生の進路や志向を考慮して、複数の日本語教材を通して教授法の変遷やそれぞれの特徴を学ぶ講義形式の授業を実施した。

2.2　実習のスケジュール

実習の主なスケジュールは以下の表 1 のとおりである。教壇実習に付したアルファベットは実習生の別を示している。詳しくは本報告と同じく『北海学園大学　日本語教員養成課程報告書』第 7 号に掲載されている、「2021 年度　北海学園大学日本語教育実習　プログラム」を参照されたい。

表 1　実習期間のスケジュール

日付	内容
11 月 15 日（月）	ガイダンス、初級授業見学
11 月 16 日（火）	初級授業見学、初級教壇実習 A、反省会
11 月 17 日（水）	初級教壇実習 B、反省会
11 月 18 日（木）	初級教壇実習 A・B、反省会
11 月 19 日（金）	中上級教壇実習 A・B、反省会、総括

3.　実習授業の内容と準備学習

前述のとおり、実習生とのガイダンスから教壇実習まで 1 か月半ほどしかなかったため、オンライン授業の特性に対応することに重点を置いた。実習を行うクラスはいずれも会話や音声表現に主眼を置いたものであったため、読解や作文ではなく口頭表現の練習が中心となる授業を行う前提で準備を行った。実習生 2 名はいずれも 2020 年度に学内での教壇実習をともなう科目である「日本語教授法Ⅲ」ならびに「日本語教授法Ⅳ」の単位を修得しており、教案作成や実習は初めての経験ではなかった。また、実習生のうち 1 名は社会人学生であり、すでに日本語ボランティアを経験していたことから、実習生のこれまでの経験をできるだけ生かす方向で授業内容を決定した。

2020 年度に実習生が履修した初級の実習授業は、直接法での文法導入に重点を置いたものであった。また、ボランティア経験のある実習生も、文型シラバスの教材に馴染みがあった。そこで、いくつかの文型を軸にしながら、ある程度まとまった話ができるようになることを目標にした授業を行うという方針に決めた。いくつかの文法を簡単に導入したり文型練習をしたりすることで初級文法を復習しながら、最終的に 1 つのテーマについてまとまった内容を話すという構成で教案や教材を作成するよう指導した。

中上級の実習授業については、これまで実習生が経験してきたのはロール・プレイによる授業であった。ロール・プレイはペア・ワークや少人数でのグループ・ワークを伴うが、オンラインでペア・ワークをスムーズに実施することは、オンライン会議システムの高度な運用能力が必要である上に、教師と学習者の間で円滑なコミュニケーションを行うための信頼関係の構築が不可欠であると考え、初級クラス同様「まとまった話ができるようにする」ことを目標にした。荻原ほか

（2005）などの既存の教材を参考にしながら、自分のことやこれまでの経験を適切な表現で話せるようになることを目標とした授業を展開するように指導を行った。

実習生のうち１名はオンライン授業の受講にも慣れており、オンライン会議ツールの扱いにも習熟していたが、もう１名はオンライン授業そのものに慣れていなかったことから、事前の模擬実習はPCを用意してオンライン会議ツールと教材であるパワーポイントのファイルを起動させ、画面共有等の操作も練習しながら行った。

4. 実習授業時の体制

機材トラブル等にすぐに対応できるように、実習生が本学の講義室（1号館A302、定員24名）から実習が行えるような体制を整えた。その模式図を以下の図1に示す。マイクやWebカメラが搭載されたノートPCを2台設置し、1台は実習生が実習を行う際に学習者に向けて話したり資料を提示したりするメイン機、もう1台はメイン機にトラブルが起きた場合のサブ機である。特に大きな問題は起こらなかったため、結局は実習を見学する実習生が授業を学習者目線で見るために用いられた。メイン機は講義室に付属されているプロジェクタに有線で音声と映像を送り、講義室内で共有できるようにした。音声をプロジェクタに実装されているスピーカーから大きめの音量で流すとハウリングを起こしたため、スピーカーの音量は小さめに設定した。2台のノートPCは学内の無線LANを介してインターネットに接続したが、時間帯によってはやや接続が不安定に感じられることがあったため、本学の担当教員（筆者）が個人研究室に有線LANで接続してあるデスクトップPCからも、実習授業が開始したことを確認した直後にオンライン会議室に入室するようにし、不測の事態に備えられるようにした。結局のところ大きなインターネット接続の問題は起こらなかったが、トラブルに対応できるような体制を整えたことで、安心して実習授業に臨むことができたと考える。

オンライン実習は大田大の教員が所有するオンライン会議システムZoomのアカウントでミーティングが設定され、本学側で用意したメインPCのアカウントを共同ホストに設定してもらうことで、画面共有やブレイクアウトルームの運用が自由に行える設定で実習が実施できた。ZoomのミーティングのURLは事前にコミュニケーションアプリ「カカオトーク」で実習生と本学の担当教員に共有され、大田大の担当教員と本学の学生間の教材ファイル等のやり取りも、「カカオトーク」を中心にして行われた。「カカオトーク」は日本でよく用いられている「LINE」等とよく似た機能を持つコミュニケーションアプリで、韓国では広く用いられている。

実習期間の初日に行われたガイダンス、授業見学、実習授業と同日に行われた反省会、総括に関しても、事前に「カカオトーク」で大田大の担当教員からZoomのミーティングのURLが共有され、本学側がそこにアクセスする形で実施された。

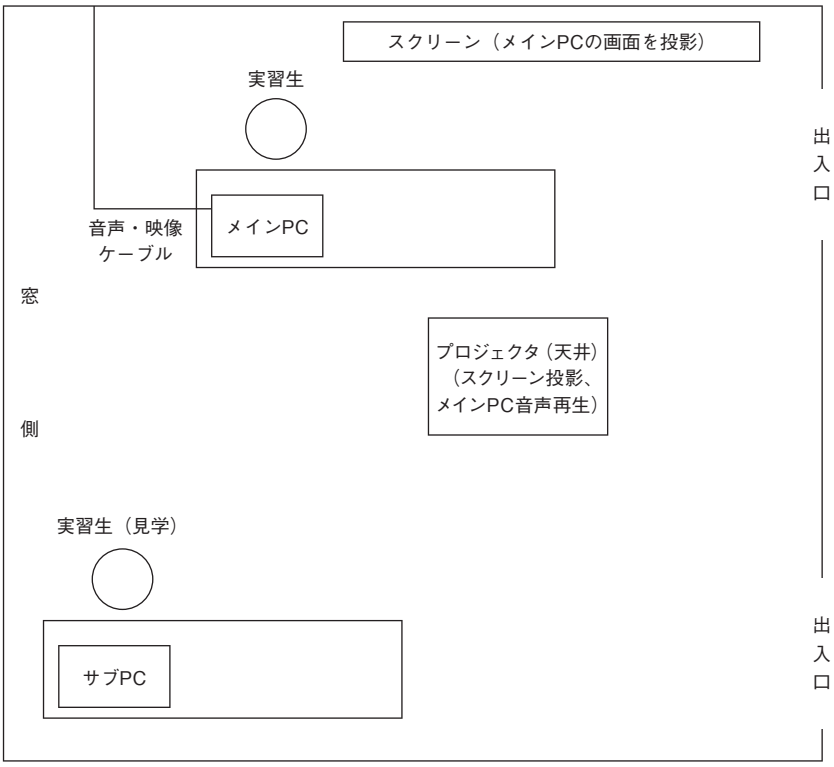


図１　オンライン実習実施時の機材配置

5. 事後授業での学び

大田大の担当教員からの実習評価シートをもとに振り返りを行ったうえで、実習の振り返りレポートを課した。

また、実習授業は限られた準備期間でも確実にオンラインで授業が遂行できることを念頭に置いていたため、学生の進路設計や志向に充分に対応した指導法を提示することができなかった。そこで、外国語教授法の変遷を概観したのち、さまざまなシラバスや教授法をもとにして作られた初級総合教材の内容を見ながらそれらの教授法の違いを意識しながら授業の進行のしかたの例を確認することで、それぞれの教材の特色を知るための学修も行った。

6. オンライン実習を通した気づき

筆者（本学の担当教員）も、これまでオンラインで学習者向けの日本語授業を行ったことがなかったため、学生の実習を通して新たな気づきがあった。

１つ目は、対面授業とオンライン授業では、教師に求められる声量が異なる点である。日本語教育における会話等の授業では 20 名以上のクラスで授業が実施されることもあるが、教員がマイク等を用いずに肉声をクラス全体に届かせなければならない場合も多い。教員の声は教員自身や学習者の衣服等によっても吸収されるため、日常的な会話では用いないような声量で話さなければならない。学習者の側もコーラスなど、複数人数で同じ発話をする場合を除けば同様である。それに比

較して、オンライン授業であれば教員や学習者の声は各々のマイクで拾われ、インターネットを介してそれぞれのデバイスで再生される。ある意味において不自然な発声をしなくとも、双方のデバイスの設定とインターネット環境が適切であればそれぞれの耳にそれぞれの発話が充分な音量で届くのである。

2つ目は、オンライン授業の受講に慣れている学生は、教師役を担った際にもオンラインツールを巧みに活用できる可能性が高いという点である。ある実習生は3回目の実習授業の少し前に、ブレイクアウトルームを活用して少人数グループでアクティビティを行うことを自分から提案した。少々心配はあったが、実際には学習者の部屋の割り振りや部屋ごとの巡視などを含め、とてもスムーズな運用を行っていた。オンライン授業を含めたICTの技能は教員よりも実習生自身が習熟している場合も少なくないため、実習生のできることをあらかじめ把握しておくことで実習授業の方法の選択肢も広がるものと思われる。また、新型コロナウイルス感染症の影響で多くの高等教育機関等でもオンライン授業への切り替えが余儀なくされたが、現在日本語教師を目指して学んでいる学生が教員になった際には、オンライン授業の受講の経験を生かして、よりICTに習熟した教員が輩出されるものと予想される。

7. まとめと展望

実習授業は大きなトラブルもなく、無事に終えることができたものの、いくつかの課題も残された。

1点目に、オンライン実習実施時においてもっとも苦労したのは、音声面のトラブルに対処することであった。講義室に集まりながら授業が講義室内で共有できるようにしたため、ハウリングを避ける調整が難しかった。また、1人の実習生からスピーカーからの音声が苦手であるためヘッドフォンを使いたいという申し出があったため、急遽メインPCからの音声をヘッドフォンとスピーカーに分配するという工夫を行った。

2点目は、オンライン実習において実習生に対面でのサポートをすることに関してである。今回は実習生の特性から、本学の担当教員がいつでもサポートできるように講義室で実習生と担当教員が場を共有しての実施が不可欠であったが、これは実習生が2名のみであったために可能なことであった。今後もオンライン実習を行うことになった際には、人数等によっては講義室で受講する学生と自宅から受講する学生に分けるなど、今回とは異なる体制の構築が必要となる可能性がある。

3点目は、オンライン授業に適した教案や教材の作成の指導を効率的に行うためのシラバス作りが必要である点である。今年度はオンライン実習の実施が決定してから実際に実習が行われるまでの日数が非常に限られていたことから、各々の実習生の経験や能力、予定に合わせて個別的に指導を行わざるを得なかった。それぞれの教案や教材を事前にじっくり見ることがなかったために、学び合いの機会が限定的であったことが反省点の1つである。

筆者が「日本語教育特別演習」を担当するのは今回が初めてであったが、今回得られた反省点や気づきは、オンライン実習のみならず、今後対面での実習が再開された際にも活用できるものと思われる。受講生のより良い日本語教育の学びのために、学修内容や方法の改善を行っていきたい。

また前述のとおり、オンライン授業を経験した世代が今後教育を担う側として社会に出ていくことで、今後さらにオンライン授業の需要のみならず、供給の量や質も向上していくものと思われる。時代の変化を注視しながら、受講生の能力を的確に伸ばしていけるような教育を行っていきた

いと考えている。

参考文献

荻原稚佳子・増田眞佐子・齊藤眞理子・伊藤とく美（2005）『日本語上級話者への道：きちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク.

黒木了二・姜蓮華（2017）「2016 年度　韓国大田大学実習日程表」『北海学園大学日本語教員養成課程報告書』第 3 号，pp.7-9.

「2019 年度　韓国大田大学での日本語教育実習プログラム」『北海学園大学日本語教員養成課程報告書』第 6 号，p.3.

日本語ボランティア教室「たんぽぽ」でのオンライン授業見学を終えて

人文学部英米文化学科３年　**吉川　真生**

2020年10月から11月までの間、日本語ボランティア教室「たんぽぽ」での秋コース全８回の授業を見学させていただきました。この年の秋コースは、コロナウイルスの影響によりZoomでのオンライン授業でした。私にとって、日本語教育の実際の場に触れるのは今回が初めてであり、学ぶことがたくさんありました。

私は、初級Ⅱのクラスを見学させて頂きました。「たんぽぽ」ではチームティーチング方式で授業が進められていることから、授業が始まる前には担当教師（T）からその日の授業の流れやアシスタント教師（TA）の動きを打ち合わせしてから始まります。私は、本来であれば見学のみでしたが「たんぽぽ」の先生方の計らいでTAとして参加させて頂けることとなりました。授業後には、参加した先生方とその日の授業の振り返りがあります。授業後の振り返りに参加しながら、学習者へのアプローチの仕方も学ぶことができました。全てを通して感じたことは、「たんぽぽ」での授業は、学習者たちの学習意欲を高めたまま能力向上を目指していたということです。ブレイクアウトルームをうまく活用することで、学習者とTAだけの空間になり、疑問点や学習者の苦手とする点を繰り返し練習できる環境となり学習者の自信へと繋がっていたと思います。また、担当教師が２授業ごとに変わるので教師によって授業のやり方が違い、色々な授業方法を体験することができたのがとても良かったです。

コロナウイルスによりZoomでの授業でしたが、そこから感じたことは、札幌市近郊の方以外でも参加できる環境になるということです。初回授業は、自己紹介から始まったのですが、そこで十勝在住の方が参加されていることがわかりました。オンライン授業になると、自分の地域に日本語教室がない方でも参加できるようになるメリットがあるのだと気づくことができました。

2020年に「たんぽぽ」での授業に参加させて頂けたことで、21年度の大学で受講した日本語教員養成課程の授業では、この時の体験をふまえた模擬授業を行うことができました。まだまだコロナウイルスの影響がある世の中ですが、今できる中で日本語教育に関係する活動に関わっていきたいと思っています。

たんぽぽさんの
オンライン授業を見学して

人文学部英米文化学科３年　**福居　桃子**

私は、日本語ボランティアたんぽぽさんの夏期オンライン授業に参加させていただきました。私自身、日本語教育の場を見学するのは初めてだったので新鮮な体験ができました。

1，授業の流れ

授業の流れとしては、学習者が事前にメールで受け取った教材に目を通し、導入部分は皆で雑談し、その日の目標表現を練習するためにいくつかの少数グループに分かれて各練習を行った後に、全体に向けて発表するという流れでした。

私は見学という形で参加でしたが、TA さんの計らいでロールプレイに参加させていただきました。

普段、座学で日本語教員養成課程を学んでいますが、そこでは感じ取りにくい「人に何かを教える」ということの難しさを実感しました。私たちが普段何気なく使っている日本語について学習者が「なぜその助詞を使うのか」という質問を TA さんにしている場面で、私はすぐに適切な答えが浮かびませんでした。また、テキストに縛られるのではなく、その場の会話の流れで話を広げることも重要だと思いました。それは、自然な会話の練習でもあり、何よりも語学を学ぶ上で最も重要な「コミュニケーションをとる」ということに繋がっていると思いました。そして毎回の授業が終わった後の反省会にも参加させていただきました。そこでは時間配分や教材の難易度をフィードバックし、各グループの内容の共有をし、次回の授業をよりよいものにするための努力が見えました。

2，学習者から学んだこと

学習者のレベルや国籍はバラバラでしたが、全員に共通して感じられたのは積極的に発言する姿勢でした。言葉に詰まってしまっても発言し、あるいは学習者同士、英語を使って助け合っていたのも印象的でした。

このように、学習者の懸命な学ぶ姿勢に、私も外国語を学ぶ立場として非常に感銘を受けました。

そして、座学では体験できない教える喜びも感じることができました。会話が通じた時や、言えなかった表現が言えるようになったときにとても嬉しくなりました。

3, 最後に

全体を通して強く感じたのが、コミュニケーションが通じることの喜びでした。やはり、TA さんと学習者、また学習者同士の会話が弾むと、学習者が楽しんで学習できると思いました。学習していて楽しいと思えることが、学習者のモチベーション向上に繋がるのではないかと思いました。

日本語学習者向け
オンライン交流会の発展

本報告書ではここまで、本学や札幌市内での活動に関する報告を行ってきた。しかし感染症の蔓延は世界的なものであり、世界中の日本語学習者や日本語教師も同様にその影響を受けている。その一方で、Zoom などのオンライン会議ツールも普及し、国や地域を超えてリアルタイムのコミュニケーションをとることに対するハードルも下がってきている。

このような状況を背景に、世界中の日本語教育関係者が、日本語学習者を含めた日本語使用者同士のオンラインでのコミュニケーションの機会を提供することも増えている。

その 1 つがオンライン会議システムの Zoom を活用したオンラインイベント「にほんご☆ぼうけん」である。国内外で活動している日本語教師が有志で運営している月 1 回のイベントで、16 歳以上の日本語学習者であれば誰でも参加できる。イベントは 90 分間で、冒頭でアイスブレイクのゲームをして Zoom の操作などに慣れたあとで、話題によって分けられたブレイクアウトルームでテーマに沿った会話を楽しむというものである。

通常は日本語学習者と見学目的の日本語教師のみが参加できるが、2021 年 12 月 18 日に行われた第 13 回では日本語教師志望者の参加も認めて頂き、本学からは 1 名の養成課程の受講生が参加した。

本学は在籍する留学生の数も多くなく、しかもこのコロナ禍にあっては日本語学習者と接することができる機会は限られている。学修の動機の高い学生でも、授業以外で日本語教育の現場や学習者の実際に触れることは難しい状況が続いている。

今後もオンラインツールも活用しながら、受講生が多様な教育現場や学習者に接する機会を、出来るかぎり設けていきたいと考えている。

「にほんご☆ぼうけん」公式 Web サイト：https://sites.google.com/view/nihongoboken/

「にほんご☆ぼうけん」体験レポート

人文学部日本文化学科２年　**齋藤穂乃花**

私は、2021 年 12 月 18 日に日本語学習者の交流会「にほんご☆ぼうけん」に参加しました。

本イベントは Zoom を使用して行われ、通常は日本語を母語としない学習者のみ参加できる企画です。

Zoom の中では話題ごとに部屋が設けられており、あらかじめ話題を用意しなくても会話を楽しめるようになっていました。好きなタイミングで好きな部屋に移動することができるので、様々な人と様々な分野について話すことができます。

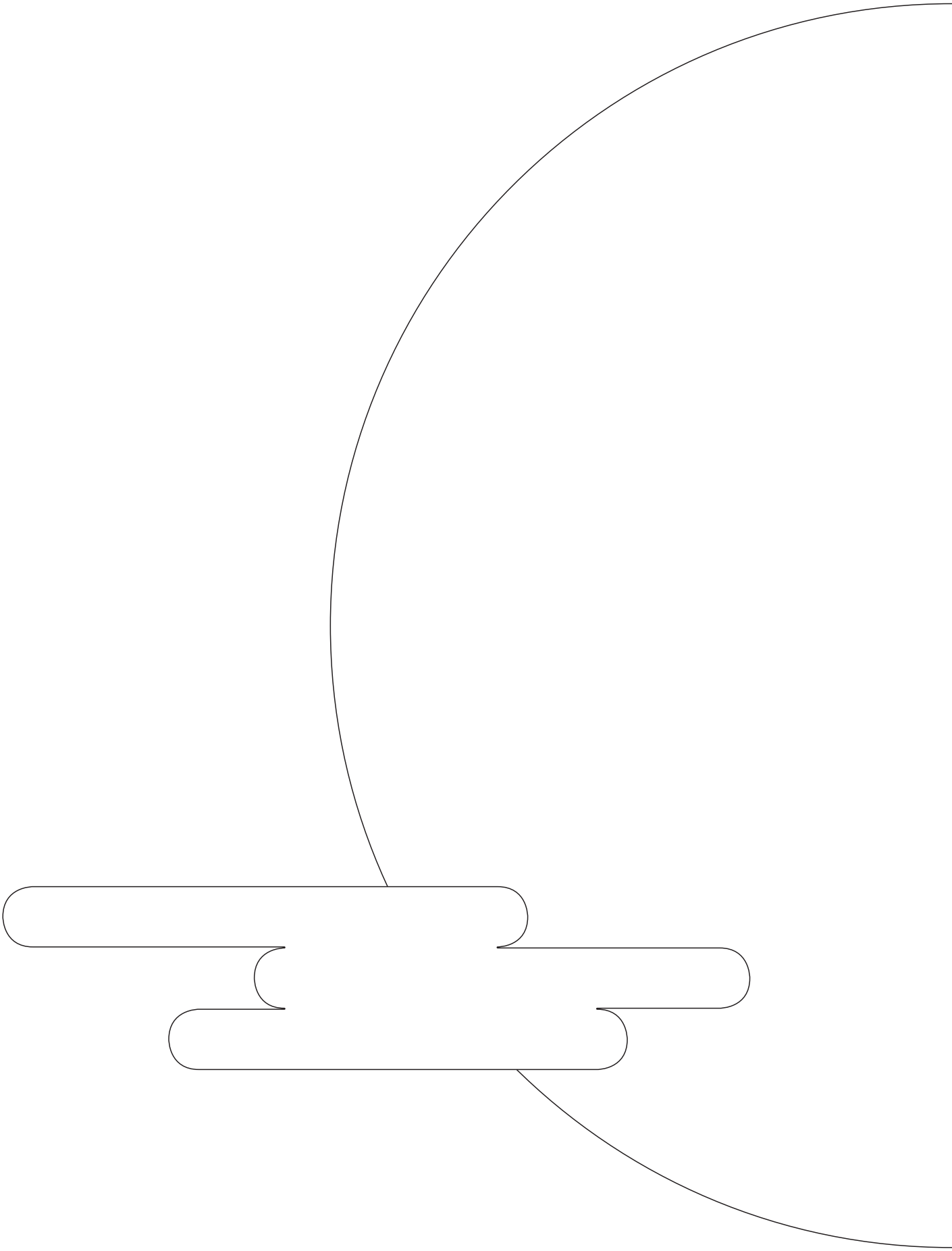
また、一部の部屋では「やさしいにほんご」を使用することが推奨されていました。私はやさしいにほんごについての事前知識がなかったのですが、事前に資料に軽く目を通すことで、問題なく交流を楽しむことができたと思います。

参加者は皆会話を楽しみたい人たちで、日本語や日本にも興味を持ってくれているため、こちらも同様に丁寧に楽しんで話そうとする姿勢さえあれば、誰でも楽しむことができるイベントでした。

また、原則カメラをつけた状態での交流となるので、相手の表情が窺えるのもよりコミュニケーションを円滑にしてくれました。ほかにも、声だと聞き取りにくい単語もチャットに打つことできちんと伝わったり、画面と音声を共有して同室の皆と動画を楽しんだりと、オンライン開催の利点が最大限活用されていたように思います。世界中の日本語学習者の人と交流する、というのもオンラインだからこそ成せたことなのではないでしょうか。

本イベントを通じて、実際に学習者の方々と交流できたことで、学習のモチベーション向上にも繋がりました。実際に「学習者」の人と離すことで、自分の課題にも気付くことができたので、実践できる場は非常に貴重で重要だと身に染みて感じました。

また、課程のことを抜きにしても、異文化交流としてとても楽しい時間を過ごせたと思います。次の機会があれば、ぜひ参加をおすすめしたいと共に、私自身もまた参加したいです。

北 海 学 園 大 学
日本語教員養成課程報告書　第７号

編　集　北海学園大学日本語教員養成課程委員会　（委員長　徳永良次）
発行日　2022 年 3 月 31 日
発　行　北海学園大学日本語教員養成課程委員会
〒 062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号
TEL (011)841-1161 (内線)2295 (丸島研究室)／ FAX (011)824-7729